

# 学生の英語学習に対する一所感：

## 文教大学越谷校舎英語クラスの授業から

A Particular View Concerning Students English Study :

The Case of Bunkyo University Koshigaya Campus Classroom

宮廻 和男

This short article presents and analyzes the basic views of the English language that students at Bunkyo University, Koshigaya, have. About 60% of 511 students, whom the author has taught in English as a second language classes since 1991, answer that they like "English"; however, about 85% of the responder students mention that they are not good at the language even if they like it. According to what they mention, it does not seem that they recognize English as a "language." Also revealed by this essay is one important problem that not only students but also teachers are often lacking in their motivation to learn the English language.

キーワード：英語教育、外国語教育、TESOL、英語、文教大学

### 1 はじめに

筆者は1991年度より越谷校舎で非常勤講師として、主に教育学部の第1外国語科目英語を担当している。91年度以来担当している『比較文学』（講義）、92年度と93年度に担当した『英米文学演習Ⅰ』を含めてこれまでに約1200人の学生を受け持った。

91年度に文教大学で初めて英語を教えたが、学生の多くが基礎文法段階で混乱し、英語に対して著しい「苦手意識」あるいは「嫌悪感」を抱いており、英語そのものの基礎的理解もきわめて不十分であることに驚いた。その年は私立高校の進学高進度クラスを非常勤担当していたため、学生の英語の苦手意識がいっそう目立ったのかもしれない。その反面、英語その

ものについては興味を持つ学生が多く、クロスワードなどの英語ゲームには熱心に取り組む姿を見ると、どうして英語が苦手であるのか理解できず、授業運営に頭をかかえることもあった。

非常勤講師といえども授業運営に当たってはクラスの英語能力を知る必要がある。基準となるような英語テストを実施し、その能力を数量化するなり的手段を講じる必要を感じたが、テストを実施し、その結果を数量化したところで、学生の「苦手意識」がわかるかどうかは甚だ疑問である。テストを通じてある文法事項が学生を悩ます要素であることがわかり、それを徹底的に復習させても、学生がその文法を理解するとはかぎらない。また、テスト結果を数量化し、他大学との比較によって得られるデータは、専任教員には入試問題作成などの点で重要な意味を持つだろうが、非常勤講師にとってはあまり意味はない。筆者のように本務校を持たない者には、大学間の能力比較よりも一大学内の学生の「実情」を知る方が授業運営にはるかに役に立つ。

以上のような事情から、英語に対して学生がどのような意識を持っているのか、その理由は何かを探り、さまざまな面で学生の意識を改善・向上できるような授業を検討する方が、学生にも筆者自身にも有益であると考え、93年度の担当クラスから以下の設問を第1回の授業で与えている。

- (1) 英語が「好き」か「嫌い」か。「得意」か「苦手」か。その理由。
- (2) 自己PR
- (3) 文教大学に入学した理由

(2)と(3)はさまざまな解答が得られ、英語の授業に反映できない内容もあるが、英語の授業に対する考えなどが比較的多く寄せられた。

学生には名刺大のカードを配布し、氏名、学籍番号、出身高校などを記入させる<sup>(1)</sup>。出身高校については、出身高校を知ることによって学生とのコミュニケーションを取る機会を得られることがあるので毎年記入させる<sup>(2)</sup>。また、期末試験では授業の感想などを任意に記述させている。

第1回の授業で回収した回答は4年間で496通で、その内訳を示す。

教育学部1年 220人／教育学部2年 114人

人間科学部1年 34人／人間科学部2年 67人

文学部（日・中）1年 25人／文学部（英文）1年 36人

91年度、92年度の一部クラスでは設問(1)のみ理由を書かずに答えさせた。94年度の旧カリキュラムの教育学部3年の英語クラスは、1年次に教えた学生であったため、この設問を与えていない。第1回の授業に欠席する学生がいるので、実際の学生数よりは若干少ない。以上のうち、英文科の学生36人を除き、91年度の教育学部51人のデータを加えた511人の回答を分析の対象とする<sup>(3)</sup>。

担当教員の顔を伺い、苦手意識を表して授業をやさしくしてもらおうという意図の感じられる回答は皆無であった。多くの記述で学生は自分の気持ちを率直に書いており、文教大学の学生らしさをよく表している。しかし、理由を明確に書かない回答は20通程度あった。

こうした得られた回答は、筆者の授業運営には大変有益なデータを与えてくれたが、現代の英語教育や教育そのものに関する問題ものぞかせており、本稿ではこれまでのデータを分析・考察し、文教大学越谷校舎における英語教育の参考に供したいと考える。

## 2 分析結果(1)―英語が好きな学生

数量的な結果を先に提示する。本来ならば学部別、学年別のデータを提示する必要があるが、全学的な調査ではないため学部、学年に偏りがあり、511人を詳細に学部、学年別に区分してデータを供することは意味がない。

数量的結果を人数で示す。

グループA：「英語は好きだが、苦手／不得意である」。「嫌いではない」、「どちらかという得意ではない」という表現の学生も含める。

グループB：「英語は好きで、得意である」。

グループC：「英語は嫌い、苦手である」。「どちらかという好きではない」、「得意ではない」という表現の学生も含める。

文教大学越谷校舎英語クラスに見られる学生の「英語学習」意識について

グループD:「英語は嫌いだが、得意である」。

グループE:「好きでもないが嫌いでもない、得意でもないが不得意でもない」、「教材や先生によって変わる」などあいまいな表現の学生。ただし91年度の25人は「不得意」とのみ記入した。

| グループ | 好 き |     | 嫌 い |     | どちらでもない |     |
|------|-----|-----|-----|-----|---------|-----|
|      | 苦 手 | 得 意 | 苦 手 | 得 意 |         |     |
| 年 度  | A   | B   | C   | D   | E       | 合 計 |
| 96   | 72  | 18  | 41  | 2   | 14      | 147 |
| 95   | 82  | 13  | 50  | 3   | 3       | 151 |
| 94   | 29  | 3   | 19  | 0   | 5       | 56  |
| 93   | 63  | 8   | 25  | 2   | 8       | 106 |
| 91   | 20  | 2   | 4   | 0   | 25      | 51  |
| 合 計  | 266 | 44  | 139 | 7   | 55      | 511 |

「好き」あるいは「嫌い」であるという点のみを計算すると、

「好き」: 310 「嫌い」: 146

となる。「得意」あるいは「苦手」であるという点では、

「得意」: 51 「苦手」: 430

となる。越谷校舎で受け持った学生の61%は英語が「好き」であり、84%の学生が「苦手」と考えていることがわかる。英語が専門ではなく、講読の授業ではおかしな訳出をし、ディクテーションでは平気でスペルを間違え、ときにはbとdの区別すら危ない、明らかに英語の「不得意」な学生たちはもっと英語嫌いであると想像していただけに、6割が英語を好きだと答えた点は意外だ。学年末テストの裏面に授業の感想などを任意に記入させると、その中に「英語はやってみるとおもしろいということがわかった」と多数の学生が記述するが、この点を考慮するならば、筆者の担当した7割から8割の学生が英語に関心を寄せていると推定される(4)。

ここで得られた結果は全学的なものではないが、越谷校舎の約7割の学

生が「英語は苦手だが、好きである」という意識を持っていると予想される。

それでは、学生が「英語が好きだ」とする理由はどのようなものであろうか。好きな理由の上位3点は次の通りである。

(i) 自分の知らない国や文化、ことがらを知ることができるのが楽しい。

(112人)

(ii) 自分が日ごろ話していない「外国語」である英語の文を理解できるとうれしく、楽しいから。文法などがわかるようになって、英語を読めるようになったら、楽しくて、好きになった。(78人)

(iii) 映画など英語を話しているのを見るとかっこいい。英語の歌を歌っているのがかっこいい。英語を話せるとかっこいい。(60人)

この3点は年度、学年に関係なく、毎年共通して見られる回答となっている。このうち、(i)と記述した学生の8割は教育学部1年生であった。いろいろな知識を吸収して広い視野を身につけ、将来小学校教員として活躍したいという学生の希望が反映していると筆者は考える。

(ii)は学部、学年に関係なく比較的多く見られる。ただし、学生の言う英文の「理解」はわずか一文であったり、わずか一言である場合が多い。むしろ、一文の文法的理解であったり、イディオムの文中での意味の理解である。学生を指名し訳読させる場合、一文の理解にこだわり、文全体の内容を理解できない。そのこだわりも、どの語が主語か、どの語が動詞か、どこまでが節のまとまりか、といった文意にこだわる以前のこだわりである。筆者がさまざまなヒントを与えて文の構造を考えるさせる。そして、1頁程度を訳出して、「それではここではどういうことを言わんとしているのか?」と問うと、学生はまず困った顔をする。ところが、提出させた作品の感想を読むと、「先生のヒントで英文がよく理解できました」と書かれている。ここからしても、学生の「英語の文を理解できる」というのは、「内容」を理解することではないことがわかる。それでも、「英語の映画や音楽を聴いていて理解できる部分があるあの瞬間がうれしい」と考え

る学生がいるのは好ましい。

さらに(ロ)後半部分の「英語を読めるようになったら、楽しく、好きになった」という点は、予備校通学経験者に多く見られるようである。学生の浪人歴、予備校学習歴までは質問していないので詳しいことはわからないが、「浪人しているときに予備校で」とか「予備校で英語を学んだときに」という添え書きがある場合が多い。

(ハ)は2年生に多く見られる。また、授業態度などから見て勉強する意欲に欠けると判断される学生に多い回答である。物事を学ぶ意味がわからなく、ただ「偏差値」マジックによって文教大学に入学したために、人間科学部であろうと、教育学部であろうと、自分の入学動機がはっきりしておらず、いかげんに授業を受けているように見える学生がこのような回答を寄せている。とくに入学理由で、60人中43人が「先生にすすめられたが、第1志望ではなかった」、「偏差値が適当だった」、「教師になるつもりはないが、ここしか合格しなかった」、「とにかく大学に入学できれば、それでよかった」のように記述している。この種の回答を寄せる学生は、授業の出席日数が少なく（英語に限らず授業全般に出席していないと聞く）遅刻が多い、予習状況が悪い、内職やいねむりなど授業中の態度が悪い、などの特徴が見られる。このような学生は、比較のおしゃれであり、服装や髪形にはこだわりがあるように見える。主観的判断ではあるが、そのような学生にとっては、英語もまた、「かっこいい」の対象にすぎず、服装や髪形と同じく「ファッション」なのであろう。

また、「英語好き」のさまざまな理由が学習態度および英語の成績とはば相関関係にある点は興味深い。(イ)と(ロ)の回答を寄せた学生は比較的授業態度がまじめであり、英語そのものに強い関心を示す。(イ)の学生は、リーディングやリスニングなど教材に関係なくそのような傾向にある。リーディング教材を使うクラスで(ロ)と答えた学生は比較的熱心に授業を受けるが、リスニング教材のクラスであると今一つ積極性に欠ける。ただしリーディングとリスニングを同時に教えた学生はいないので、相関性は確実なもの

ではない。(ハ)の回答をした学生は、リーディングでもリスニングでもあまり授業に熱心ではなく、決して成績も良いとは言えない。

その他の回答としては、「英語を知っていると世界にはばたけるような気がする」(1名)、「英語がきれいに聞こえると音楽を聴いているような気がする」(数名)、「外国人と英語で話して通じたから」(数名)などがある。

好きな英語をどのように学びたいかという点については、自己PRとして、かなりの学生が一言添えてくれた。一言添えてくれた学生のほとんど全員が「会話を学びたい」と回答した。人間科学部の学生の数名は「英検2級に合格したい」としている。

しかし、「英語は好き」だが「文法を覚えたり、単語を覚えたりするのがつらい。文法を理解できない」と答えた学生のほぼ全員(グループAのほぼ7割を占める)が、英語上達の努力をしているようには見えない。

以上の点を考慮すると、多くの学生にとって「英語が好き」の「好き」というのは、俳優が好き、流行の歌が好きというのと同等のレベルにあると考えられる。500数名の回答の中に、就職に英語力が有利となると考えている学生はほとんどいなかった。これは教育学部の場合は教職が第1希望だから仕方ないが、人間科学部の学生でも就職あるいは卒業後の進路と英語との関連性はまったく実感が無いようだ。低学年対象の質問という点と問の内容設定という点にも問題はあるとはいえ、「就職」ということに触れた回答は皆無である。また、「国際化」とか「国際社会」と言われる今日であるが、そのような言葉はまったく見られない。

越谷校舎の学生は、とりあえず英語「好き」だが、その背景には「苦手・不得意」意識があることを、授業運営にあたって理解する必要がある。

### 3 分析結果(2)ー英語が嫌い、苦手な学生

英語が嫌いな学生と英語が苦手な学生のそれぞれの理由は、ほぼ共通し

ている。それは次の数点に絞られる。

- (イ) 文法や単語を覚えたりするのがつらい。文法を理解できない。
- (ロ) 中学、高校の英語の授業について行くことができなかった。
- (ハ) 英語教員の指導に問題があった。

(イ)は「嫌い」・「苦手」の7割近くの学生の回答である。これは個人の努力不足、勉強不足も原因としてあろうが、(ロ)、(ハ)の理由とも密接に結び付いている。

「嫌い・不得意」と回答した学生の中には、日文科で『源氏物語』などの古典文法を詳しく説明してくれたり、中文科で漢詩などを楽しそうに解釈してくれた学生もいる。教育法の専門用語を説明したり、音楽の楽譜を読み楽器をみごとに演奏する学生もいる。古典や漢詩や楽譜が読めることは、英語ができなくてもすばらしいことであろう。英語は世界に何百とある言語のひとつにすぎないと考えるならば、英語ができなくても他の言語に才能を見いだせる場合もあるだろう。古典文法も楽器演奏もそれぞれに、英語と大差ない「難しさ」であると思うが、それでも英語が「難しい」と考えるのはなぜであろうか。

そして、「英文法や単語を覚えるのは嫌いで、講読もおもしろくないが、英会話やリスニングならばやってもよい（おもしろそうだ）」と記入する学生はきわめて多い。こうした学生は、自分が英語ができないこと、さらに英文法を覚えたり、単語と熟語を覚えることは「受験英語」であり、本来の「英語」でもなく、「英語の学習」でもないと考えられる傾向にある。しかし実際に英会話やリスニングの授業を行うと、最初は熱心に取り組むが、だんだんと脱落する学生が現れる。英会話やリスニングも、結局、文法を覚え、単語や熟語を暗記することによって得られる知識によることがわかり、そのような事実が気がついて上達しようという努力をしないために、これもまた「受験英語」のせいにするという悪循環に陥る。ある学生は「日本人が英語ができないわけは教育にある。文法、構文など机学習ばかりで実践がない、他の外国人（英語圏外）の英語勉強法は、とにかく会話

だそうだ。ある中国人いわく『ボクは英語の勉強をはじめて3年で、今、ハワイで英語教師をしています』。私は英語を勉強をはじめて8年目。なんてこった…』(原文のまま)と書いている。

こうした学生の「誤解」とその「誤解」によって招かれる「悪循環」は(α)、(β)の理由とも密接に関連しており、さらには英語学習のモチベーションの問題とも関連する。後者については後述し、さらに(α)、(β)について考察を進める。

(α)の理由としては、ほとんどが本人の怠けによるものである。「努力していなかったので苦手」とはっきりと記入する学生も多い。その怠け心は大学での英語の授業でも続き、英語の予習はしない、出席率が悪く、授業そのものを大切にしないなどの行為が見られる。教師を目指す学生がこのような態度を取ることは大きな問題である。ただし、この(α)の理由については、先に指摘したように、本人の責任と言えない部分もある。やはり英語学習のモチベーションの問題もあり、さらに(β)の問題がある。

(β)については、かなりの学生が何らかの形で言及している。学生の記述から、あるいは学生との話を通して推測される問題で、中学、高校の場合は以下の点が挙げられる。

- ①マニュアル通りの指導で、応用が利かないという教員の英語力の問題。
- ②教員の教え方の問題。

- a) 「英語は単語力だ」とか間違った「信念」のもとに指導をする。単語をひたすら暗記させ、英文をむやみに文型分けさせ、「木を見て森を見ず」的な授業を展開する。
- b) 英語は高校入試、大学入試だけのものと錯覚し、「点数」、「偏差値」を「語学力」の判断基準とする。あくまで「大学合格」のための英語として英語を考える。
- c) 教科書とマニュアルの内容を消化することに懸命で、応用項目どころか、基礎的な説明すら表面的に解説してしまう。
- d) 学生が「わからない」ということを理解しないために、「どうして

わからないのか？」の一言で、それ以上指導をしない。

これらの場合、学生は学習に嫌気を見せる。そして授業にも嫌気を示し、英語学習から落ちこぼれていく。「高校の時、大学の英文科の人が使うという難しい英語をひたすら訳させられた。さらに、きれいで、ちゃんとした日本語でないと『君の日本語は日本語じゃないね』などといびられた。それから英語が苦手になった」、「中学校のときの英語の先生は、英語の苦手な生徒に対し容赦がなかった。厳しいというわけではないが、苦手な生徒を無視して授業を進めた。それ以来の英語の苦手は今だに続く。もちろん、自分にやる気が足りないことも感じてはいる」（以上原文のまま）といった記述がしばしば見られる。これらは教員の資質の問題にもなるだろうが、やはり指導の問題であろう。「高校の時の先生がわかりづらくて一生懸命勉強して、点数が取れても、授業を受けたらやる気がなくなった。点数はある程度は取ったけど、英語がいやになった。そうしたら苦手意識が生まれてしまった。だけど点数が取れるのは不思議だった」（原文のまま）という回答もあった。さらに、次の点を指摘をする。

③「入試」という問題と教員の問題。

- a) ここの高校ではいい大学に入れないと、英語の指導を怠る。
- b) コース別・能力別制を導入している学校で、進学コースではないために英語は「形」だけの指導しかしない。
- c) 英語の成績不振の学生に対して差別的優遇を行い、指導を放棄する。

④教員としての資質の問題。

- a) 高い英語の能力を持ち、中学・高校教員職に不満を持つ。
- b) サラリーマンと化し、教育に情熱を持たずに教員をしている。
- c) 自己の出世・評判を重んじ、学生が大学に合格することしか考えない。
- d) 学生を馬鹿にして授業をまじめにやらない。英語の成績不振の学生を相手にせず、一部の優秀な生徒のみを特別扱いする。
- e) 間違えると怒る、叱る。生徒は萎縮し、間違えることを恐れ、その

ため英語が上達せず、英語嫌いになる。

(f)の問題は大学の英語クラスでも見られる。超谷校舎の場合、学生からの回答中、学生が「英語がますます嫌いになった」、「好きになれない」、「好きだったが嫌いになった」とした理由で教員関連の指摘は次の通りである<sup>(5)</sup>。指摘は筆者が要約した。

A) 教員が学生のレベルを把握せずに授業を進める。基礎的項目を「大学生だからわかっているだろう」と言って説明しない。学生には高度すぎる授業内容となってしまう。

B) 学生の能力を過小評価し、中学レベルの文法説明に止まる。学生は馬鹿にされていると感じる。

C) 学生に教えることを面倒臭がり、授業後の質問などを受け付けない。あるいは質問にきちんと答えない。教員に対する不信感が生じる。

D) 教員の雑談内容が学生に不快感を与え、英語嫌いの副次的原因となる。

E) 私語、内職、居眠りを注意しないで、学生の学習意欲を減じる。

A) については、教員が「当然学生には、これだけの英語の知識があるはずであり、持っていなければならない」と考えてしまう傾向から生じる場合が多いのではないだろうか。授業開始時に小テストなどをクラスで行い、学生の実力を把握するなど、教員側の工夫が必要であろう。D) については、間接的に学生を傷つけるような場合がある。「担当の先生は一生懸命やってくれたが、自分の家庭（あるいは自分）の自慢が多くて、本当に馬鹿にされているようでいやであった」、「家族の職業や出身大学（在学大学）の話毎回聞かされうんざりした」という回答や、また「聖書（米国史など）を読んでいないと必要以上に繰り返し非難された」という回答が数点ある。中には「実家は寺で、仏典はいろいろ読んでいる」、「教養として米国史を知る必要はあるとは思いますが、専門でもなく、興味もない本を読んでないからといって非難される必要があるだろうか」などと添えられていた。指導の仕方ひとつで学生は「馬鹿にされた」と思い、ま

すまず英語を勉強しなくなることを教員は知る必要があろう。これに関しては、「間違えると叱られる」ということも「馬鹿にされている」という意識につながっている。間違いを叱ることにどれだけの意味があるのだろうか。

さらに、「大学の先生に質問してはいけない」、「大学の先生に簡単なことを質問したら馬鹿にされる」と考える学生の数は少なくない。また、「質問をしたら、何をまじめにやっているかと友達に馬鹿にされたり、からかわれる」といった困った事実もある。

これらの問題は、文教大学に限らず、現在の日本の教育の場全体の問題ともいえるかもしれない。しかし、その場を文教大学に限定してみても、学生の英語嫌い、苦手意識は本人にだけでなく、中学、高校、大学の学校と教員サイドにも原因があることがわかる。

#### 4 モティベーションという問題

最後に、学生の英語に対する意識の分析から明らかとなった問題として、「英語学習のモチベーション」という点を指摘する。この点は学生にも英語教員にもしばしば欠けていると考えられる。

学生が「英語好き」だが「苦手」であり、それを克服しない、そして授業も漫然と受けてしまう最大の原因は、「なぜ英語を学ぶのか」という意識が欠落していることにある。どのようなメソッド、テキストを使っても、どれだけ教員が熱心に指導しても、学生と教員の双方が「なぜ英語を学ぶのか」という英語学習のモチベーションを持ち、理解しなければ、授業の成立はありえない。学生の意識は「英語が役立つとは思いますが、自分とはあまり関係ないと思っているから勉強しない」、「英語を勉強しても実際に使う場はなく、英語の本などをふだん読む必要もない」に集約される。

学習モチベーションは大学生なら自分で見つけるべきだ、という教員の意見は十分に理解できるが、英文科の学生でない場合、ほとんどの学生の目下の英語学習のモチベーションは「単位取得」ということ、つまり

卒業に必要な科目であるということにある。文教大学越谷校舎の学生の多くは、自分の専攻分野に関してははっきりした学習目的を持っている。この点は文教大学への入学理由、自己PRからかなり読み取ることができる。したがって、こと英語に関して、直接の専門でもなく、海外旅行へ行くにも今は通訳機器があり苦勞する必要もないのだから、学生が英語学習のモチベーションを自分で見つけられなくてもおかしいことではない。

しかも、高校までの英語学習のモチベーションは「入試突破」に尽きる。大学入学という目的を達成した後、英語学習のモチベーションが欠如するという点も不思議なことではない。

さらに、教員サイドの「英語は勉強しなければならない科目である」、「英語は国際化社会で必要である」、「英語はできて当たり前である」などの不明確で、義務的なモチベーションにも問題がある。英語を専攻分野とせず、とくに必要でもなく、これまで大学入試突破が第一義で、今は単位取得が第一義である学生には、本来あるべき英語学習のモチベーションを教員が付与することは学生に対する甘やかしとして行わずにいることは、もはやできないのではないだろうか。そうなると、英語教員も「なぜ英語を学習するのか」というモチベーションを明確に持つ必要が必然的に生じることになる。

当然、教員それぞれがそれぞれのモチベーションを持つことになるが、それを学生に強要することは断じて避けるべきである。しかし、それぞれの教員は「なぜ英語を学習するのか、教えるのか」というモチベーションを学生に明確に示すべきである。この点は「語学にかぎらずなにかを学ぶにあたっては、その対象に自分が強い関心や興味をもっているということがだいじなのです。強い関心や興味があれば、人から『学びなさい』と言われなくても、自分の意志でやりたいと思うようになります」<sup>(6)</sup>としばしばなされる指摘からその必然性が明確となる。加えて、筆者の担当した約6割の学生が英語が好きだと言い、さらに残りの1～2割の学生が英語を好きになる可能性を潜在的に持つと考えられる現段階では、教員側

が英語を学び、教えるモチベーションを明確にすることで、多くの学生が英語に強い関心を持ち、英語学習のモチベーションを持つ可能性を十分に期待することができると考えられるからである。

現実問題として、学生に「国際社会で活躍するためには英語の知識は不可欠である」と言っても全く説得力を持たない。筆者のクラスを見る限りでは、学生の帰属意識（つまり「教育学部」、「人間科学部」、「文学部」の学生であるという意識）を高め、その専門性と結び付くようなモチベーションを付与することが効果的であるように見受けられる。このような「帰属意識」が学習効果を高めることは、しばしば指摘される<sup>(7)</sup>。たとえば筆者は教育学部の学生に、英語を学ぶことで異文化を知り、それによって他者をみすえるという視点が得られる、その視点ははじめ問題を考える上でも重要な視点であり、教員には不可欠である、といった自己が教育学部に所属し、将来は教員になるのだという意識と関連させる英語学習のモチベーションを実験的に付与している。現段階では詳細な成果を確認していないが、学生の提出物（文学作品講読における内容把握の設問や各章終了時に提出してもらった感想文など）には「小学校教員」という立場を意識した内容が多くなり、熱意あるペーパーを提出する学生もかなり多い。クラスによっては作品内容に関して自主的に意見を述べる学生もいる。こうした点からも、文教大学の「英語好き」だが「苦手、不得意」という学生の「苦手、不得意」意識を取り去り、「英語は大嫌い」という学生を「好き」という意識に向けるためには、メソッド以前にこうしたモチベーションを明確にすることが不可欠な作業となることは明らかである。

ここでは文教大学在学生のほんの一部の意識を取り上げたにすぎない。全学対象に調査を実施すれば、もっと違った結果が出るであろう。しかし、ここで得られた結果は、ともすると学生の「英語能力向上」ばかりに目を取られる教員に、学生そのものの存在を意識させるものになると考える。そして、ここで考えるべき点は、文教大学に限らず、英語教育一般にも大きく関係することは論ずるまでもない。

注

- 1) このカードは学生を指名し、評価などをメモすのために使用される。
- 2) 筆者の知人が勤務する高校や過去に教えた学生と同一高校の出身者などに何らかの機会にその点を話しかけると、熱心に授業に参加するようになる。
- 3) 91年はカードに記入させた。92年は任意回答させたクラスがある。
- 4) 年度末の感想は「単位認定」に関わる答案に任意に書かせるため、資料の質を確保する目的上、本稿の分析には使用しない。
- 5) ここで挙げる指摘は、筆者の授業においてA評価を認定された出席率9割以上の学生の回答で、類似の内容が全回答中10点以上あったものに限定する。中傷とも見られる内容を避け、回答の有効性を少しでも高めるために、少なくとも筆者の授業を熱心に受講した学生に限定する。また、同じく回答の有効性を高めるために、10点以上の類似回答に限定する。以上2点を限定することで、学生の指摘を教員への単なる中傷と区別できるものとする。本稿は教員側の問題を指摘することが主目的ではないので、回答数は掲載しない。A)～C)が英語指導関連、D)とE)が授業関連である。
- 6) グレゴリー・クラーク、『クラーク先生の英語勉強革命』、76頁、1996年6月、ごま書房、東京。
- 7) 荒木博之、『日本語が見えると英語も見える一新英語教育論』、195頁、1994年10月、中央公論社、東京。